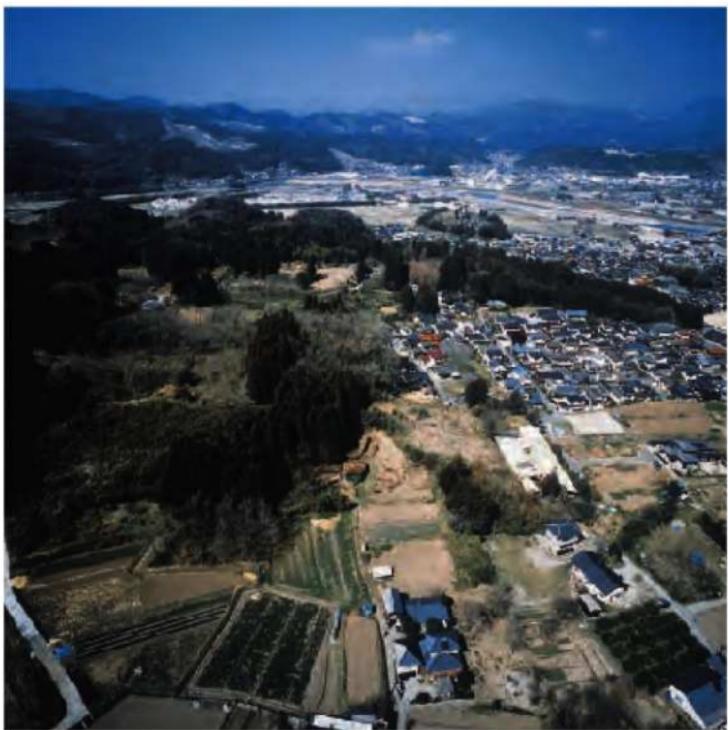


日田地区遺跡群発掘調査報告2
日田市埋蔵文化財調査報告書第41集

穴 觀 音 古 墳

2003年

日 田 市 教 育 委 員 会



穴観音古墳全景（南より）

序 文

穴観音古墳は昭和8年に国の史跡に指定された装飾古墳であります。日田市内にはこの穴観音古墳の他にガランドヤ1、2号墳、法恩寺山3号墳と合わせ、4基の装飾古墳が存在します。また、装飾古墳は筑後川流域に多くみられ、筑後地方と深い関係の中で日田の地にも装飾古墳が作られたと考えられます。

今回、本書で報告します調査は、国史跡の指定地外での範囲・内容を確認する目的で行われました。その結果、これまで確認されてなかった周溝が発見され、これを含めた直径は約25mになることがわかりました。

このような調査の成果を地元住民や市民にお知らせするため、現地説明会を開催し、また現在は中止している横穴式石室の公開を行いました。まだ、寒さの残る時期にも関わらず、100名をこえる方々にご来訪いただき、古墳に対する関心の高さを改めて実感することになりました。

市教育委員会では、今回の調査結果をもとに指定地の追加申請を行っていきたいと考えております。

最後になりましたが、ご多忙にも関わらず、現地において有益なご指導いただきました福岡大学・小田富士雄教授、別府大学・下村智助教授、ならびに別府大学学生のみなさん、調査中にわたってご協力いただきました地権者の方々に心より感謝申し上げます。

平成15年3月

日田市教育委員会

教育長 後藤元晴

例　　言

1. 本書は日田市教育委員会が遺跡範囲内容確認調査に伴って、国庫および県費の補助を得て行なった大分県日田市所在穴觀音古墳の発掘調査報告書である。
2. 調査にあたっては、福岡大学・小田富士雄教授、別府大学・下村智助教授に現地において、ご指導をいただいた。また、別府大学・下村智助教授はじめとして学生の皆さんには墳丘ならびに周辺地形の測量をしていただいた。
土地所有者の羽田斎氏・野村恒太氏・深津正光氏・野村覚氏には様々な便宜を図っていただいた。
記して感謝申し上げます。
3. 本書に掲載した遺構写真是担当者および有限会社雅企画・長谷川正美氏の委託によるものを、空中写真については有限会社スカイサークル九州の委託によるものを使用した。また、遺物写真については有限会社雅企画・長谷川正美氏の委託によるものを使用した。
4. 発掘現場における実測作業は担当者が行なったほか、有限会社雅企画・森山敬一郎氏の委託による。遺物実測については担当者が行なった。
5. 東京文化財研究所の朽津信明氏より装飾の彩色顔料についての玉稿をいただいた。
6. 本書で用いる遺構図の方針はすべて真北である。
7. 遺構・遺物の製図は担当者のほか、藤野美音氏の協力を得て行なった。
8. 図版中の番号は、すべて挿図番号と一致する。
9. 出土遺物および図面類については、すべて日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
10. 本書の執筆・編集は若杉が行った。

本文目次

Iはじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 穴観音古墳の概要	2
3. 調査経過と調査組織	2
II遺跡の立地と環境	3
III調査の内容	5
IVまとめ	13
V日田穴観音古墳の彩色顔料について	16

挿図目次

第1図 穴観音古墳横穴式石室実測図 (1/100)
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)
第3図 遺跡位置図 (1/5,000)
第4図 穴観音古墳周辺地形図 (1/500)
第5図 穴観音古墳測量図およびトレンチ配置図 (1/200)
第6図 1 トレンチ平面図・土層断面図 (1/50)
第7図 2・3 トレンチ平面図・土層断面図 (1/50)
第8図 4 トレンチ平面図・土層断面図 (1/50)
第9図 5~8 トレンチ平面図・土層断面図 (1/50)
第10図 出土遺物および表採遺物実測図 (1/3)

写真図版目次

巻頭図版 穴観音古墳全景 (南より)	③ 1 トレンチ埴丘版築
写真1 発掘調査作業風景	④ 2 トレンチ完掘状況 (東より)
図版1 ①穴観音古墳全景 (北より)	⑤ 2 トレンチ周溝
②穴観音古墳全景 (真上より)	⑥ 2 トレンチ東側土層
図版2 ① 1 トレンチ完掘状況 (東より)	図版3 ① 3 トレンチ完掘状況 (南東より)
② 1 トレンチ周溝	② 3 トレンチ周溝

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| ③ 3 ドレンチ東側土層 | ④ 6 ドレンチ土層 |
| ④ 4 ドレンチ南側完掘状況（南より） | ⑤ 7 ドレンチ完掘状況（東より） |
| ⑤ 4 ドレンチ周溝 | ⑥ 7 ドレンチ土層 |
| ⑥ 4 ドレンチ溝 | ⑦ 8 ドレンチ完掘状況（北より） |
| 図版4 ① 5 ドレンチ完掘状況（東より） | ⑧ 8 ドレンチ土層 |
| ② 5 ドレンチ土層 | 図版5 出土遺物 |
| ③ 6 ドレンチ周溝（南より） | |

表 目 次

第1表 土層対応表

第2表 出土遺物および表採遺物観察表



写真1 発掘調査作業風景

I はじめに

1. 調査に至る経過

穴観音古墳は昭和8年に国史跡に指定された装飾古墳であり、市内では成宜園跡に次ぐ2番目に古い国史跡である。昭和47年には墳丘を覆う屋根と周囲にブロック塀が設置され、古墳の保護措置が行なわれた。しかし、この措置がかえって墳丘に悪影響を与え、墳丘盛土の乾燥、流出が進行した。さらにこれにより、石室内に外気が侵入し、内部の乾燥化が進み、装飾の退色、石材の劣化・剥落という現象が起きた。このような中、市教育委員会では地元神社の祭りの時期に合わせて、毎年4月上旬に石室を公開してきたが、前述の事情により平成13年度より原則として一般公開を行なわないことにした。

一方、古墳の周辺には古い集落や新興の住宅団地が点在しており、近年宅地開発の件数も増加してきており、平成12年度には古墳の東側で個人住宅建設に伴う発掘調査を実施している。このような開発の波は穴観音古墳の隣接地でも例外でなく、一時、宅地開発の話が持ち上がったということであった。そのような状況を踏まえ、市教育委員会では現在、未指定地における古墳の範囲内容を確認し、史跡地の追加指定や今後の保護に向けた資料化を目的として、調査を行なうこととなった。その後、地権者との話を進め、同意を得た後、国庫・県費の補助を得て平成14年2月12日より発掘調査を開始した。

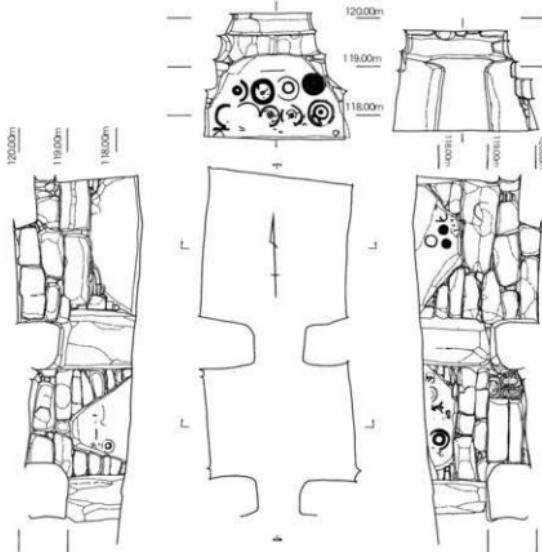
2. 穴観音古墳の概要（第1図）

穴観音古墳は調査前まで径約12m、高さ約4mと考えられていた円墳である。主体部は複室の横穴式石室で、その規模は全長約6.9m、玄室長約3.2m、玄室幅約3m、玄室高約2.6m、前室長約2.4m、前室幅約3m、前室高約2mである。石室の壁体は最下部に大型の腰石をすえ、その上部や側部に切石をやや持ち送りながら積み上げ、

隙間に割石を充填している。奥壁には大型の鏡石を据え、天井石との間には石棚状に突出させた板石が見られる。

装飾は赤と緑を使って前室両側壁、玄室奥壁・右側壁に描かれている。前室右側壁には円文・両手を広げた人物・飛鳥、同左側壁には2つの舟・同心円文など、玄室右側壁には円文・塗りつぶした円文・大型の飛鳥など、奥壁には緑と赤を交互に使った同心円文・三角文・直線文などが描かれている。石室内からの出土遺物はこれまでには認められていない。

註) 渋谷忠史他編『大分県の装飾古墳』
大分県文化財調査報告書第92輯
大分県教育委員会 1995



第1図 穴観音古墳横穴式石室実測図(1/100)(註文献より転載、一部改変)

3. 調査経過と調査組織

調査は墳丘周辺の竹林、畑に6本のトレント設定して平成14年2月12日より開始した。まず、墳丘西側に茂っていた篠竹伐採後、トレントの掘り下げを行なった。1トレントでは近年の盛土を除去した後、トレントの幅を半分にして掘り下げを継続した。深さ約2.1mで黄褐色土の地山を検出、版築を行なった墳丘盛土の一部と周溝を確認できた。この状況は2トレントでも同様であり、深さ約1.7mで地山を検出、墳丘盛土は削平を受けていたが、周溝を確認できた。3、4、6トレントについても周溝を確認した。この時点で、周溝は墳丘の周囲を巡ることが確実になり、さらに確認を得るために、トレントを3本追加して掘り下げた。その結果5、7トレントで周溝を検出、8トレントでもやや方向が異なるものの、周溝を確認できた。

これらの作業と平行してトレントの写真撮影・実測、また別府大学の協力により墳丘と周辺地形の測量も行なった。その後3月16日に空中写真撮影を行ない、3月24日に現地説明会の実施と同時に一般公開を中止していた石室も特別に公開した。説明会には100名をこえる地元の方や市民が訪れた。

その後、真砂土により造構の保存措置をした後、機械と人力により埋め戻し、3月27日に調査の全日程を終了した。

なお、調査関係者は次の通りである。

平成13年度（発掘調査）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 後藤元晴（日田市教育委員会教育長）

調査指導員 小田富士雄（福岡大学教授）下村 智（別府大学助教授）

調査事務 原田俊隆（日田市教育委員会文化課長） 石井英信（同課長補佐兼文化財係長）

島崎誠司（同主査） 園田恭一郎（同主任） 原田恭子（同臨時職員）

調査員 渋谷忠章（大分県教育庁文化課課長補佐）小柳和宏（同理蔵文化財係主査）

行時志郎（日田市教育委員会文化課主任）吉田博嗣（同主任）

若杉竜太（同主事）調査担当 渡邊隆行（同主事）

発掘作業員 江田千枝子 杉森久恵 野村クミコ 野村多美子 野村浪子 野村義子 藤野美音

森山キヨ 吉田ヤフミ 吉田ヨシエ

来訪者 後藤一重（大分県教育庁文化課埋蔵文化財係副主幹）

平成14年度（報告書作成）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 後藤元晴（日田市教育委員会教育長）

調査指導員 小田富士雄（福岡大学教授）下村 智（別府大学助教授）

調査事務 後藤 清（日田市教育委員会文化課長）田中伸幸（同文化財管理係長兼埋蔵文化財係長）

園田恭一郎（同主査）酒井恵（同主事補）

調査員 土居和幸（日田市教育委員会文化課埋蔵文化財係主査）行時桂子（同主任）

若杉竜太（同主事）渡邊隆行（同主事）

II 遺跡の立地と環境（第2図）

穴観音古墳の所在する長者原台地は通称「原(はる)」と呼ばれる日田盆地内に多く見られる発達した台地の1つで標高は約120mである。長者原台地は三隈川左岸に位置し、南側の津江山系から連なる北端に位置する。三隈川左岸の「原(はる)」はこの他に上野原、陣ヶ原などが小谷を挟んで存在する。これらの台地より標高の低い部分には扇状地・河岸段丘がみられ、さらに川との間に狭い沖積地が展開する。このような地形的な特徴は遺跡の立地状況にも反映されている。右岸地域では台地周辺に広い河岸段丘・沖積地が広がり、大規模な遺跡が展開するのに対して、左岸地域では大規模な遺跡は沖積地上にはあまり見られず、河岸段丘上・台地上に集中している。

三隈川左岸一帯は古代の日田郡五郷のうち、石井郷に属した地域で石井駅が置かれていた。その具体的な所在地は判明していないが、近年の調査でその様相が明らかになりつつある。以下、このような状況を示す三隈川左岸の遺跡を長者原台地を中心に概観していく。

穴観音古墳周辺一帯は旧石器時代から近世にかけての遺構や遺物が確認された長者原遺跡にあたる。これまでに数次にわたる調査が行なわれ、縄文時代早期の押型文土器や晩期の黒色磨研土器、古墳時代後期の竪穴住居などが確認されている。平成12年度に行われた5次調査では弥生時代後期前半、同中頃～後半の環濠、古墳時代中期の竪穴式石室や石棺が確認されている。⁽¹⁾また穴観音古墳西側に広がる長者原田迎遺跡では弥生時代から古代にかけての竪穴住居跡・掘立柱建物・溝、中世の掘立柱建物・柵列・土坑・井戸・溝、近世の土坑などが確認されている。また、穴観音古墳の近辺には横穴式石室を主体部とする倉庫古墳が存在したと言われるが、現在は消滅しており、その所在は不明である。⁽²⁾

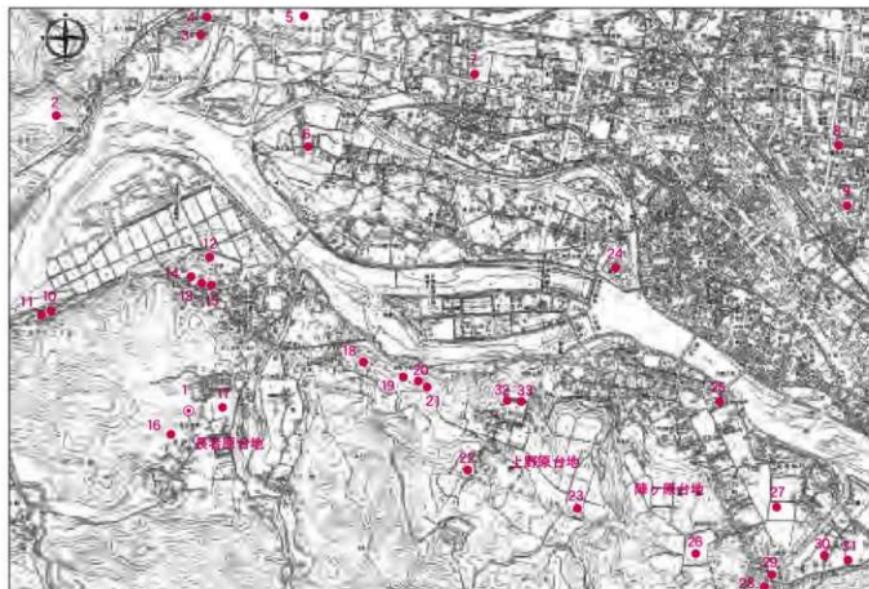
台地北側の沖積地上には2基の装飾古墳を含む3基の円墳から成るガランドヤ古墳群がある。1号墳は複室構造の横穴式石室の玄室奥壁と仕切り石に赤と緑を使って、人や馬、鳥などや円文、「8」字状、「X」字状の文様などが描かれている。2号墳は单室もしくは小規模な前室をもつと思われる横穴式石室を主体とする。壁面全体を赤で塗布し、奥壁には複線山形文、馬、同心円文などが描かれている。1・2号墳ともに出土遺物から6世紀後半の築造と考えられる。このガランドヤ古墳群の北側の独立丘陵上には中世後半の墓地などが確認されている隈山遺跡がある。また、ガランドヤ古墳群の西には横穴式石室を主体とする円墳の津辺古墳群がある。⁽³⁾

次に台地の裾に目を転じると寺内遺跡の東側には護岸寺古墳群がある。この古墳群は1基の前方後円墳と2基の円墳から成るが、1号墳は市内に4基ある前方後円墳の1つで墳頂約30mの規模を有する。⁽⁴⁾

長者原台地東側の上野原台地の中央付近に所在する上野第1遺跡では8世紀前半～中頃にかけての遺構から「豊馬豊馬」と刻まれた石製品や転用硯などが出土し、石井駅と関連する施設の存在が考えられている。この遺跡の西側には弥生時代中期初頭の窓棺墓群や奈良時代の掘立柱建物が確認された上野第2遺跡、縄文時代～中・近世にいたる遺構・遺物が調査された寺内遺跡がある。⁽⁵⁾

台地東側の陣ヶ原台地では古墳時代～奈良時代の遺構が調査された陣ヶ原辻原遺跡がある。また、陣ヶ原台地北東側の高瀬川沿いの扇状地には縄文時代、古墳時代、古代の集落などが調査された高瀬深ノ田遺跡、高瀬条里深野田地区がある。ここからやや下流右岸の河岸段丘上には弥生時代中期の土坑や後期の大溝が発見された惣田遺跡、横穴式石室をもつ惣田塚古墳がある。一方、左岸の河岸段丘には高瀬条里永平寺地区があり、中世期の掘立柱建物などが検出されている。その北側、三隈川を見下ろす段丘先端部には竪穴式石室を主体部とし蛇行剣が出土した姫塚古墳がある。⁽⁶⁾

- 註（1）土居和幸編『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』日田市教育委員会 1986、1987、1990
- 註（2）若杉竜太「長者原遺跡4次」渡邊隆行編『平成12年度(2000年度)』日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2001
- 註（3）行時志郎編『長者原田迎遺跡』日田市埋蔵文化財報告書第5集 日田市教育委員会 1992
- 註（4）小柳和宏編『ガランドヤ古墳群－大分県日田市所在表誌古墳の調査報告－』日田市教育委員会 1986
- 註（5）土居和幸『隈山遺跡』若杉竜太編『平成10年度(1998年度)』日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000
若杉竜太『隈山遺跡』同編『平成11年度(1999年度)』日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2001
- 註（6）渋谷忠章『第4節 古墳文化の展開』『大分県史』先史篇 大分県 1989
- 註（7）田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査 3 上野第1遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III 大分県教育委員会 2001
- 註（8）高橋徹也編『日田市高瀬遺跡群の調査 4 寺内遺跡 上野第2遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IV 大分県教育委員会 2002
- 註（9）田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査 1 慶和神社裏遺跡 後藤家墓地 陣ヶ原辻原遺跡 高瀬深ノ田遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I 大分県教育委員会 1995
- 註（10）行時志郎編『高瀬条里深野田地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第36集 2002
- 註（11）土居和幸他編『惣田遺跡』日田市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 1994
- 註（12）行時志郎編『日田条里上手地区Ⅲ 高瀬条里永平寺地区 尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集 2001



1 穴觀音古墳	10 津辻1号墳	19 護岸寺1号墳	28 高瀬条里深野田地区 (高瀬条里深野ノ遺跡)
2 六原遺跡	11 津辻2号墳	20 護岸寺2号墳	29 高瀬条里深野田地区
3 星隈横穴墓群	12 隈山遺跡	21 護岸寺3号墳	30 惣田塚古墳
4 三郎丸古墳	13 ガランドヤ1号墳	22 上野第2遺跡	31 惣田遺跡
5 萩鶴遺跡	14 ガランドヤ2号墳	23 上野第1遺跡	32 上野姥塚古墳
6 徳瀬遺跡	15 ガランドヤ3号墳	24 日隈遺跡	33 上野カグネ塚古墳
7 嬉四郎遺跡	16 長者原田迎遺跡	25 姫塚古墳	
8 日田条里飛矢地区	17 長者原遺跡	26 陣ヶ原遺跡	
9 日田条里大原地区	18 寺内遺跡	27 高瀬条里永平寺地区	

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

III 調査の内容

調査では古墳周囲に8本のトレンチを設定し、南西側から時計回りに1~8トレンチとした。土層番号については各トレンチ毎に付している。また、各トレンチ間には共通に見られる層があり、その対応関係については、表に示している。（第5図、第1表）

1 トレンチ（第6図 図版2）

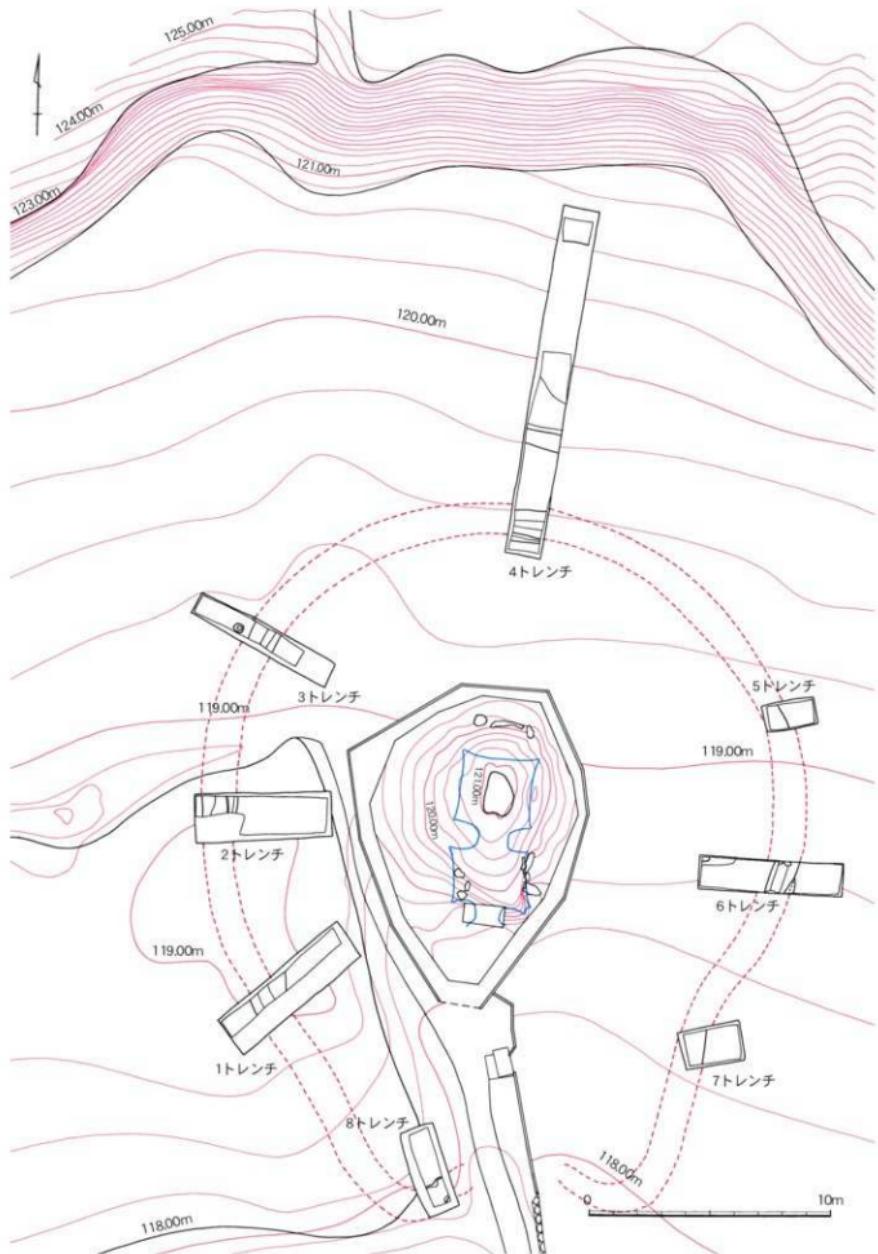
墳丘の南西側に設定した6.3m×1.7mのトレンチである。墳丘の西側は地権者の話によると数十年前に約1mの盛土を行なったとのことであった。そのためまず、広い幅で盛土部分の掘り下げを行ない、その後半分の幅で周溝の確認を行なった。その結果、



第3図 遺跡位置図 (1/5,000)



第4図 穴観音古墳周辺地形測量図 (1/500)



第5図 穴観音古墳測量図及びトレンチ配置図 (1/200)

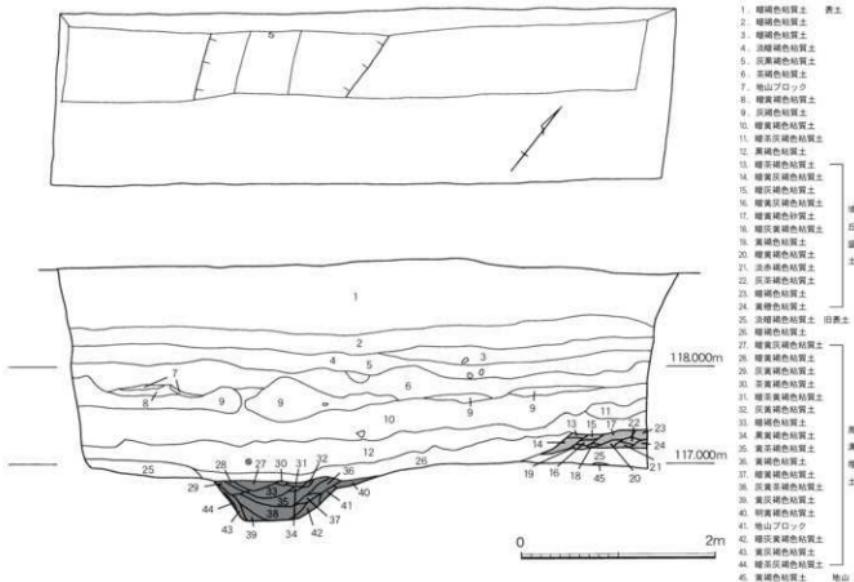
地表面より約2.1m下で地山を検出した。地山は東から西に向かって緩く傾斜しており、トレンチの西端より約1.5m～3mの地点で幅約1.5mの周溝を検出した。その後、周溝を掘り下げた結果、深さは約50cmであることが確認できた。当初、周溝が浅いことから上部が削平を受けたものと考えたが、土層観察の結果、トレンチ東側で版築を行なった墳丘盛土が確認されたことから削平を受けていないとの判断した。

堆積状況を見てみると上層は前述した後世の盛土、その下層は腐植土層や礫層が堆積している。黒色土の12層は墳丘の削平後、堆積しているが、層中より13～14世紀頃の遺物が出土している。この時期の層はすべてのトレンチで確認されている。13～24層は墳丘の版築で黒色土系と黄色土系の互層である。この版築は1トレンチのみで確認されている。その下層の25層は旧表土である。この旧表土は周溝を掘り下げる過程で削られ、周溝は前述のとおり地山を掘り下げて作られている。周溝埋土は27～44層で、その堆積状況から当初内側の方が崩れて、その後は両側より埋まっていたことが窺える。

トレンチ内からは土師器蓋・須恵器杯蓋・短頸壺・長頸壺・高杯などが出土している。

2 トレンチ（第7図 図版2）

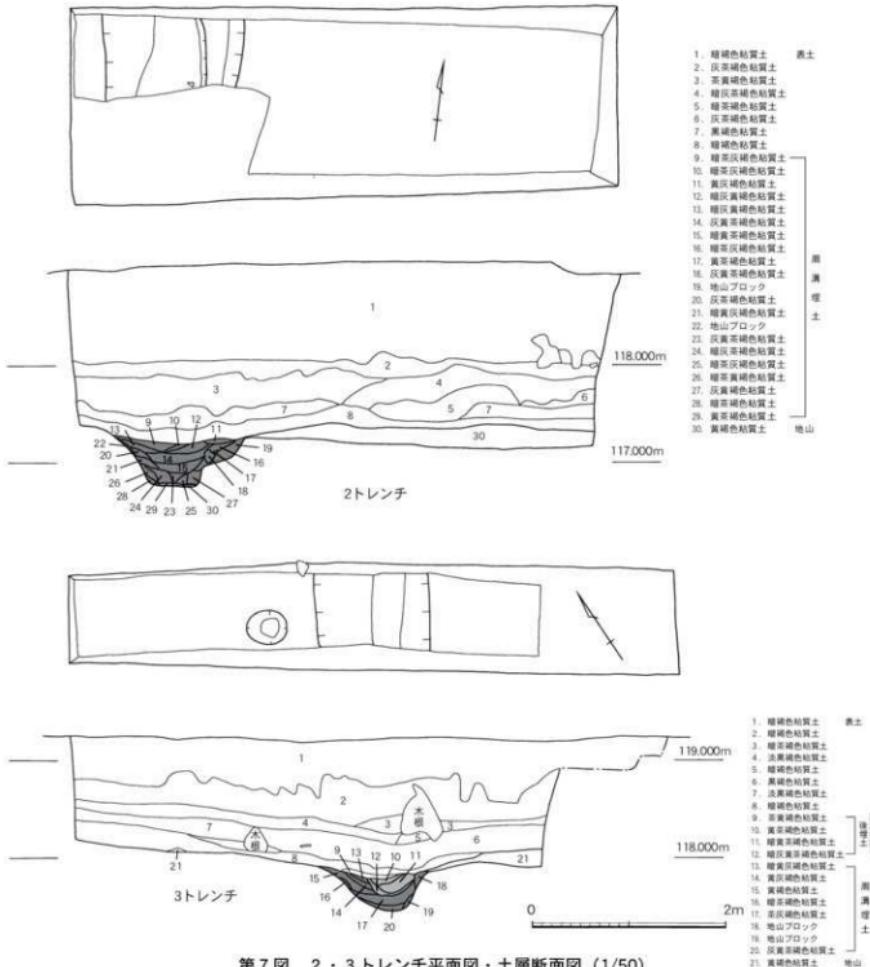
墳丘西側に設定した5.6m×1.8mのトレンチである。周溝はトレンチ西端から約1.3mの幅で確認された。深さは約30cmである。ここも1トレンチ同様に盛土がかなりの厚さで堆積しており、その下層は腐植土層などが見られる。各トレンチで見られる黒色土層は本トレンチでは7層にあたる。このトレン



第6図 1トレンチ平面図・土層断面図 (1/50)

チでは墳丘盛土の版築は見られず、削平されている。その時期は7層がほぼ水平に堆積していることから黒色土層の堆積以前、少なくとも13~14世紀以前の時期の削平と考えられる。また、旧表土が確認できず、周溝埋土と黒色土層の間層（8層）が地山直上に堆積していることから墳丘構築は地山まで整地して行なわれたと考えることができる。周溝の埋土は9~30層で1トレンチ同様内側の肩が崩れ、両側よりブロックで埋まっていることがわかる。その後、9~15層の状況から掘り直しが行われていることが確認できる。

トレンチ内から須恵器蓋・杯身・短頭壺などが出土している。



第7図 2・3トレンチ平面図・土層断面図 (1/50)

3 トレンチ（第7図 図版3）

墳丘北西側に設定した6.2m×1.1mのトレンチである。周溝はトレンチ北西端より約2.5～3.7mで確認された。現地表面からの深さは約1.3mで、周溝の深さは約40cmである。他のトレンチに対応する黒色土層は6層である。その下層には周溝埋没後の堆積層（8層）と地山が見られ、版築ならびに旧表土は確認できなかった。周溝の埋土は9～20層で、肩の崩れは見受けられない。溝の埋没後、10～12層の状況から掘り直しが認めらるが、2トレンチの掘り直しと同時期であるかは不明である。

遺物は須恵器長頭壺と思われるものが出土している。

4 トレンチ（第8図 図版3）

墳丘北側に設定した14.4m×1.5mのトレンチである。周溝はトレンチ南端より約0.4～1.7mの地点で確認され、幅約1.3mである。現地表面からの深さは約1.1mで、周溝の深さは約0.7mである。他のトレンチに対応する黒色土層は15層である。トレンチの中央付近には、この黒色土層を切って、幅約9m、深さ約1.2mの大溝が確認された。溝の埋土は両端からほぼ時期を同じくして順に堆積していくことが窺える。溝内からは遺物が出土していないため、時期ははっきりしないが、黒色土層を切っていることから少なくとも13～14世紀以降のものと考えられる。

周溝は埋土の状況から、内側の肩が崩れてはいるものの、両側からほぼ均等に土が堆積していくことが窺える。

5 トレンチ（第9図 図版4）

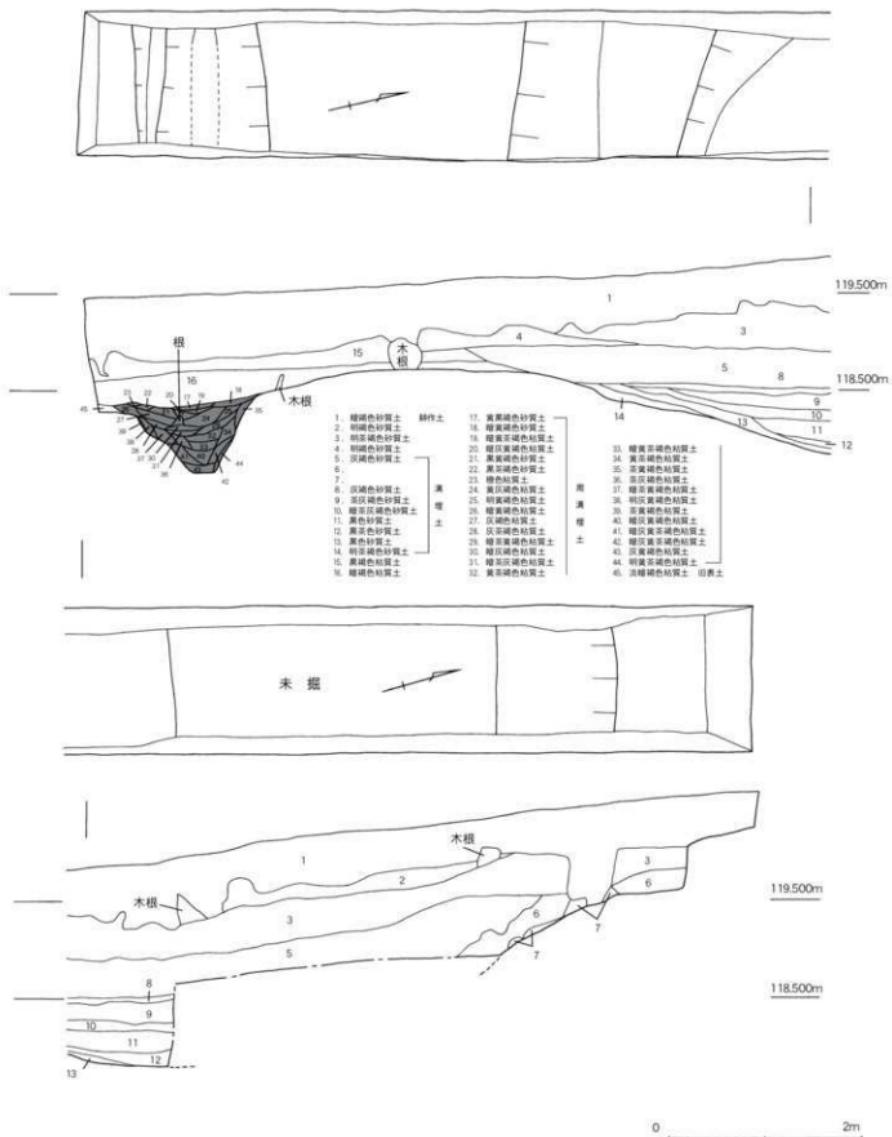
墳丘北東側に設定した2.7m×1.1mのトレンチである。周溝はトレンチ西端より約1mの地点で外側の肩が検出された。地表面からの深さは約1mである。土層の堆積状況は耕作土が約60cmあり、その下に黒色土が堆積する。周溝外側の肩を確認するために設定したトレンチであるため、周溝の幅、深さについては確認を行なっていない。

6 トレンチ（第9図 図版4）

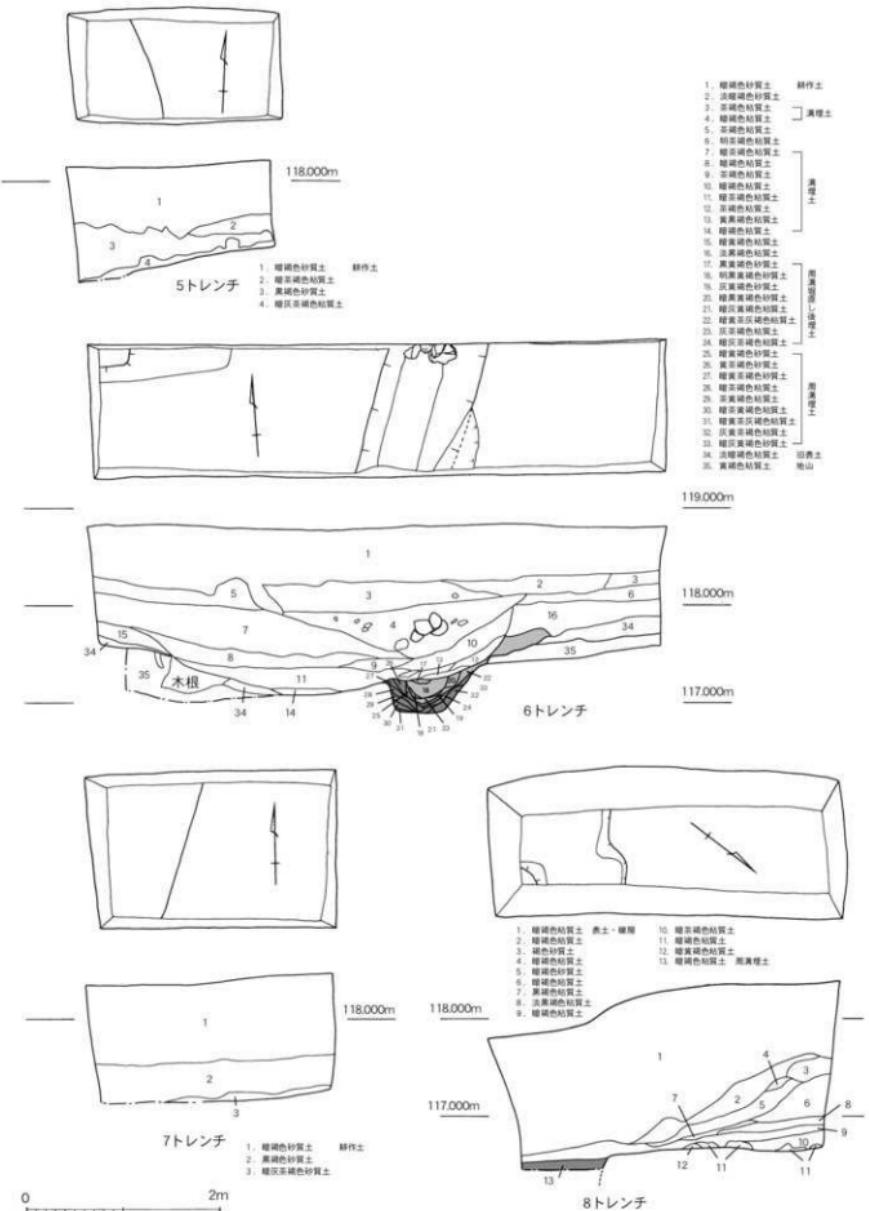
墳丘東側に設定した5.9m×1.4mのトレンチである。周溝はトレンチ東端より約2～3mの地点で確認できた。周溝は後世に2回にわたる溝の掘削で大きく削平を受けていたため、現地表面からの周溝の肩までの深さは外側で約1.5m、内側で約1.6mである。また、周溝の深さはもともと残りのよい外側の肩から約50cmである。

このトレンチにおいて他のトレンチで見られる黒色土層が見られ、16層にあたる。この16層の堆積後、5～14層の埋土がみられる溝、さらにこの溝の埋没後、3、4層の埋土が見られる溝が掘り込まれている。これらの溝については黒色土層を切っていることから少なくとも中世前期遺構と考えられる。一部上層より近世の染付けも出土しているが、時期の決め手とするにはやや材料に乏しい。

周溝については外側の埋土である22層が確認できた肩より約20cm上まで堆積していることから築造当初は少なくとも約70cmの深さがあったと考えることができる。溝の埋没状況は両側からほぼ交互に堆積している。その後、17～24層の堆積状況からから掘り直しがあったと思われる。また、トレンチ西側には地山の高まりが見られた（34層）。当初は地山削り出しの墳丘の可能性も考えたが、土層観察からははっきりせず、旧表土の一部として考えたほうが妥当であろう。



第8図 4トレンチ平面図・土層断面図(1/50)



第9図 5~8トレーナー平面図・土層断面図 (1/50)

遺物は前述したように近世の染付が数点出土しているのみである。

7 トレンチ（第9図 図版4）

墳丘南東側に設定した2.6m×1.6mのトレンチである。周溝はトレンチ東端から約1.5mの地点で外側の肩が検出された。地表面からの深さは約1.3mである。地表面より約80cmの深さまで耕作土が堆積し、その下層は黒色土と層序は5 トレンチと同様である。周溝の幅、深さについては周溝外側の肩を確認するためには設置したトレンチであるため、確認を行なっていない。

遺物は出土しなかった。

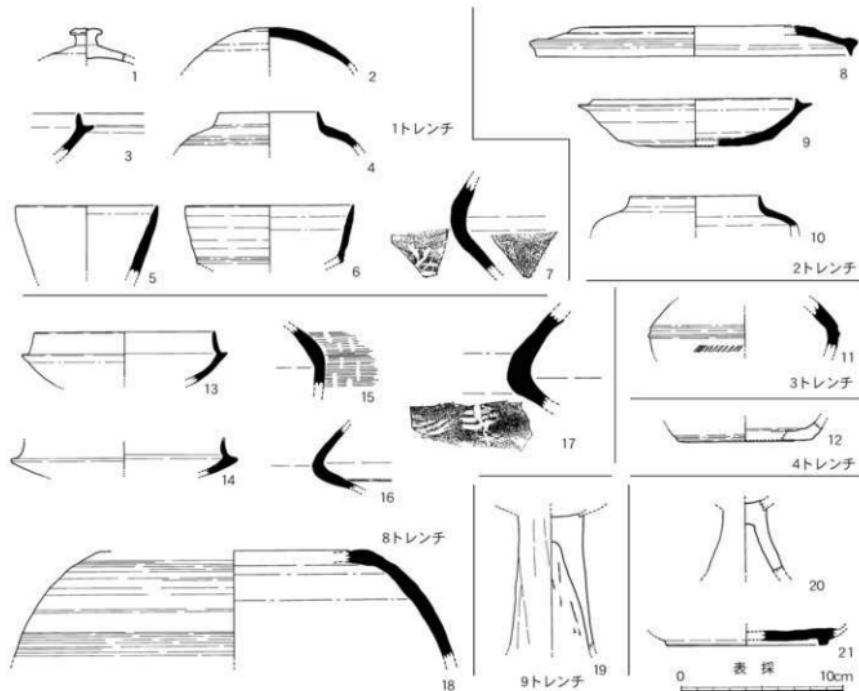
8 トレンチ（第9図 図版4）

墳丘の南側に設定した3.6m×1.5mのトレンチである。このトレンチは1、2 トレンチと同様に盛土を行なっている部分があり、もっとも厚い部分で約1.5mある。周溝はトレンチの南東端から約1mの地点で検出された。地表面からの深さは約1.5mである。この部分の周溝のめぐる方向は他のトレンチで確認された周溝とは異なり、墳丘周縁を円形に巡る方向にはなっていない。石室主軸方向から墓道との関連性も窺える。この部分も一部掘り下げのみにとどめたため、その深さについては確認を行なっていない。

出土遺物については須恵器杯身・甕・短頸壺、土師器高杯などが出土地してある。

出土遺物（第10図 第2表 図版5）

遺物は大部分がトレンチ内より出土したものである。1～6は1 トレンチ出土である。1は土師器蓋である。外面には回転ヘラケズリが明瞭に残る。2は須恵器杯蓋である。外面中位あたりまで回転ヘラケズリが施されている。3は須恵器杯身である。口唇部内面の段、沈線は見られない。4は須恵器短頸壺である。口縁部端部まで強い回転ナデが見られる。5は須恵器長頸壺の口縁部と考えられる。内外面ともに回転ナデが施される。6は須恵器高杯の杯部である。7は須恵器甕である。頭部外面には1条の沈線が施されている。8～10は2 トレンチ出土である。8は須恵器蓋である。端部はつまみ出しである。9は須恵器杯身である。10は須恵器短頸壺である。11は3 トレンチ出土で須恵器長頸壺と思われる。胴部最大径部分に沈線、その下部に刻目を施す。12は4 トレンチ出土の土師質土器の小皿である。外底面は回転糸切りの痕が見られる。13～19は8 トレンチ出土である。13、14は須恵器杯身である。13は口縁部立ち上がりが高く、杯部が深いのに対して、14の口縁部立ち上がりは低く、杯部も浅いことから、若干の時期差があると考えられる。15は須恵器長頸壺の肩の部分と思われる。外面にはカキ目が見られる。16、17は須恵器甕の頭部である。16は外面に1条の沈線が施されている。17は内面に同心円文タタキが見られる。18は須恵器長頸壺、もしくは短頸壺と考えられる。外面にはカキ目が見られる。19は土師器高杯の脚部である。外面にはケズリ、内面はナデが施される。20、21は表面採集品である。20は土師器高杯の脚部で杯部底面がわずかに残る。21は須恵器高台付杯である。高台は底面の端部に貼り付けられている。



第10図 出土遺物ならびに表探遺物実測図 (1/3)

IVまとめ

今回の調査は古墳の範囲確認を目的として行なったが、これまでに確認されていなかった周溝の存在が明らかになるという大きな成果があった。また、墳丘盛土の版築が確認されたことにより、古墳の規模も確認することができた。

墳丘について

従来は現存する墳丘部分のみで径約12mと考えられていたが、調査により周溝を含んだ規模は約25mであったことが判明した。また、1トレーニチで確認された版築の端部から墳丘規模を復元すれば、径は約19mになる。しかし、版築の端部から周溝まで地山が緩やかに傾斜している点からこの部分を地山削り出しの墳丘と考えれば、径は約23~24mの規模になる。墳丘の高さについては、1トレーニチで確認された周溝の内側の肩から現状墳丘の中心まで約4mあるが、前述したように墳丘盛土が流出しており、築造当時は現在よりも数mは高かった可能性もある。また、墳端から墳頂部までの傾斜が急であることから、墳丘は1段もしくは2段築成であった可能性もある。⁽¹⁾

周溝について

周溝については各トレーニチの状況から幅1.5m前後、深さ40~70cmの規模であることが分かった。また、周溝底のレベルをみると北側に位置する4トレーニチが約117.7mと最も高く、1トレーニチで約116.4mと最も低くなっている。5、7、8トレーニチについては検出のみとどめたので、周溝底のレベ

ルは不明だが、北側から南側に向かって緩やかに傾斜していることがわかる。

周溝の形態については確認された各トレンチの状況から、左側の玄門あたりに中心が求められ、墳丘を巡ると考えられるが、1、7トレンチの周溝の肩はその線上よりやや外側に逸れる。また、8トレンチの周溝はまったく異なる向きになっており、幅も狭くなっている。これは位置的にも墓道との関連が窺え、8トレンチの東側で周溝はなくなり、陸橋状になっていると考えられる。また、今回の調査で8トレンチから出土した遺物が最も多く、それも地山付近から出土したことは墓道祭祀と密接な関連があると考えられる。

築造時期について

古墳の築造時期についてはこれまで石室の構造や切石を使用していることなどから6世紀末から7世紀の時期が考えられていた。今回出土した須恵器についても田辺編年TK43あたりまで測るものがあるものの、大部分はTK209～TK217の範疇に収まると考えられ、従来からの年代観と大きく隔たりがないといえよう。

穴観音古墳の位置付け

今回の調査により、明らかとなつた穴観音古墳の規模は約23mである。この規模は県内の円墳では別府市・鬼ノ岩屋1号墳とほぼ同じで13番目の大きさである。田中裕介氏は、前方後円墳と同じくクラスの首長墳として、20m級の円墳を挙げており、穴観音古墳もそれに含まれる。さらに関東地方を除く列島各地で前方後円墳の築造がほぼ終了し、首長墳が円墳・方墳化していく6世紀末～7世紀初頭の時期の墳丘規模からみて穴観音古墳は十分に首長墳クラスの古墳ということができよう。

さて、長者原台地をはじめとして、三隈川左岸は前述のとおり、古代律令制下では石井郷に含まれる。この石井郷は大きく長者原台地と上野原・陣ヶ原台地とそれぞれの周辺に分けることができる。この地域の古墳をみてみると長者原台地とその周辺には穴観音古墳のほかにガランドヤ古墳群・津辺古墳群・護岸寺古墳群・陣ヶ原台地北東の河岸段丘上には惣田塚古墳・姫塚古墳などがある。

盆地内で古墳の築造が増加する後期は、三隈川右岸には前方後円墳2基から成る朝日天神山（天満）古墳群をはじめ、法恩寺山古墳群・三郎丸古墳・尾瀬古墳などが見られる。一方、左岸は護岸寺古墳群をはじめとしてガランドヤ古墳群・津辺古墳群・穴観音古墳など中小規模の古墳が点在する状況が見られる。このうち2基の前方後円墳から成る朝日天神山（天満）古墳群は6世紀第2四半から第3四半にかけて築造された古墳群で、2号墳は墳頂約63m、全長85mと日田地方では最大の規模をもつ。さらに1号墳には三輪玉が副葬されるなど、畿内との密接な関係が窺え、筑紫君磐井の乱後における大和政権の九州支配の一拠点であったと考えられる。これらの点から朝日天神山（天満）古墳群の被葬者は盆地内各地を治めた首長層の頂点に立ち、その下に法恩寺山古墳群・尾瀬古墳・ガランドヤ古墳群などの中小首長層が6世紀前半から後半にかけて存在していたと考えられる。

三隈川左岸地域における首長墳の系列は5世紀前半の姫塚古墳以降、6世紀末～7世紀初頭の穴観音古墳まで連続と続いていることが窺われ、特に長者原遺跡の竪穴式石室・石棺墓群、護岸寺古墳群、津辺古墳群、ガランドヤ古墳群、穴観音古墳と石井郷の中でも長者原台地とその周辺の地域では5世紀以降の首長系譜が追える地域として注目することができる。この状況を三隈川左岸全体でみた時、西側の長者原台地とその周辺はほぼ継続的に古墳が見られるのに対し、東側では台地上で古墳は現存してなく、高瀬川河岸段丘上に姫塚古墳、惣田塚古墳が現存する程度である。未確認もしくは消滅してしまった古墳の存在も考えなければならないが、やはり西側の長者原台地周辺に比べて絶対数は少ないと思われる。

れる。さらに護岸寺古墳群に前方後円墳が存在する点を考えれば、その時期は盆地内でも盟主的な地位にあり三隈川左岸地域の中心地は西側の長者原台地とその周辺にあったと考えるのが妥当であろう。その首長墓系譜の中で最後に築造されたのが穴観音古墳ということが指摘できる。

今回の調査では墳丘規模や周溝の存在を確認するなど、一定の成果を挙げることができた。しかし、墳丘背後地の急傾斜の斜面が古墳築造時に掘削されたのか、後世の掘削によるものか、本報告でも一部指摘した周溝と墓道との関係など、さらには装飾や墳丘の保護措置など今後の課題が多い。

また、今日の調査結果をもとに史跡地の追加指定を行っていくことも急務である。

註（1）福岡大学・小田富士雄教授のご教示による。

註（2）田辺昭三『陶邑古窯址群』研究論集第10号 平安学園考古クラブ 1966 ほか

註（3）田中裕介編『大分の前方後円墳—三重・西国東地区編』大分県文化財調査報告書第100輯 大分県教育委員会 1998

註（4）平成9～14年度に別府大学の協力を得て、日田市教育委員会が調査を実施。三輪玉は1次調査の際に1号墳石室周辺より表揚。

註（5）ただし、上野原台地の北端には上野姥塚古墳、上野カグネ塚古墳があったとされるが現在は消滅している。上野カグネ塚古墳については、円墳で横穴式石室を主体としている。

註（6）護岸寺古墳群の時期については6世紀前半と考えられているが、時期を決定づける明確な資料がない点や6世紀前半に朝日天神山（天満）古墳群が築造されていることから、同時期の存在と考えるより、若干古い5世紀後半から6世紀初頭のもとを考えた方が妥当と思われる。

第1表 土層対応表

トレンチ	1	2	3	4	5	6	7	8
黒色土	12層	7層	6層	15層	3層	16層	2層	8層
墳丘土土	26層	8層	8層	16層	4層	22層	3層	9層
旧地表面	25層	—	—	45層	—	34層	—	10層
地 山	45層	31層	21層	—	—	35層	—	—

第2表 出土土器観察表

遺構名	神図番号	種 別	胎 磁	法量(cm) ()内は 幅×径・残存高)		調 整		胎 土	燒 成	色 調
				口径	底径	高さ	外 面			
Iトレチ	第10回1	土師器	直	—	—	(2.1)	回転ヘラケズリ	回転ナデ	A E	やや不良 赤褐色
Iトレチ	第10回2	須恵器	杯蓋	—	—	(2.5)	回転ヘラケズリ	回転ナデ 不整方向ナデ	A E	良好 灰黑色
Iトレチ	第10回3	須恵器	杯身	(6.2)	—	(2.6)	回転ナデ	回転ナデ	A H	良好 灰白色
Iトレチ	第10回4	須恵器	短鉢直	(8.8)	—	(2.2)	回転ナデ カキ目	回転ナデ	A H	良好 灰白色
Iトレチ	第10回5	須恵器	長瓶直?	(10.4)	—	(4.3)	回転ナデ	回転ナデ	A H	良好 黄灰褐色 灰白色
Iトレチ	第10回6	須恵器	高杯	—	—	(3.6)	回転ナデ	回転ナデ	A H	良好 灰白色
Iトレチ	第10回7	須恵器	甕	(20.2)	—	(5.7)	ナデ タキホ	ナデ タキホ	G H	良好 灰黑色
2トレチ	第10回8	土師器	直	(14.4)	(9.2)	1.9	回転ヘラケズリ	回転ナデ	A H	良好 灰黑色
2トレチ	第10回9	須恵器	杯身	(8.0)	—	2.9	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 不整方向ナデ	A H	良好 灰黑色
3トレチ	第10回10	須恵器	短鉢直	—	胴部径 (11.8)	(2.0)	回転ナデ	回転ナデ	A H	良好 暗灰褐色 灰白色
4トレチ	第10回11	須恵器	直	—	(8.2)	(3.0)	回転ナデ	回転ナデ	H	良好 明灰褐色
8トレチ	第10回12	土師質土器	杯	(11.0)	—	(1.2)	回転ヘラカズリ 回転ナデ	回転ヘラナデ	A D E	やや不良 淡赤褐色
8トレチ	第10回13	須恵器	杯身	—	—	(3.2)	回転ナデ	回転ナデ	A G H	良好 灰白色
8トレチ	第10回14	須恵器	杯身	—	—	(3.8)	回転ナデ	回転ナデ	H	良好 黄灰褐色
8トレチ	第10回15	須恵器	長瓶直	—	(6.8)	(3.9)	カキ目	ナデ	A E F	良好 灰褐色
8トレチ	第10回16	須恵器	甕	—	—	(10.0)	ナデ	ナデ	A D E	良好 灰白色
8トレチ	第10回17	須恵器	甕	—	—	(5.9)	ナデ	ナデ	B C E	良好 灰黑色
8トレチ	第10回18	須恵器	長瓶直?	—	—	(6.8)	カキ目	ナデ	A H	良好 灰白色
8トレチ	第10回19	土師器	高杯	—	—	(8.4)	ケズリ	ナデ	A H	良好 赤褐色 淡赤褐色
表 案	第10回20	土師器	高杯	—	—	(4.5)	ケズリ?	ナデ?	A B E	不良 赤褐色
表 案	第10回21	須恵器	甕	—	(10.0)	(1.0)	回転ナデ 不整方向ナデ	回転ナデ 不整方向ナデ	A E F	不良 灰黑色

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

V 日田穴観音古墳の彩色顔料について

東京文化財研究所 柄津信明

1. はじめに

日田市穴観音古墳に彩色壁画が描かれていることは、賀川¹⁾によって記載されて以降、広く知られている。この古墳で用いられている彩色顔料については山崎²⁾によって化学分析が行われ、それによれば赤としてベンガラ、そして黒としてマンガンを含む黒色鉱物（以下、「マンガン土」と呼ぶ）の二種類が用いられていると報告されている。しかしながらその一方で、斎藤³⁾によればこの古墳で用いられているのは「朱色と緑色」とされており、以降「赤と緑の二色が用いられている」という記載がなされている文献も数多く出版されている。信号機の「進め」の色を「青」と呼ぶ人もいれば「緑」と呼ぶ人もいるように、色名の表現というのは人によってまちまちな面があるが、装飾古墳における緑色顔料というのは、セラドナイトという比較的珍しい鉱石が用いられていると指摘されているため、その使用が認められるかどうかは、単に色名の問題ではなく、使用材料の面からその古墳の築造背景を理解する上でも重要な論点となる。つまり、個々の紋様が何色で表現されているかというよりは、その特別な緑色の材料が使用されているのか否かという面において、「緑か黒か」の問題は注目されるものである。例えば日田市内でも、ガランドヤ1号墳では緑色顔料の使用が分析によって既に確認されているが、穴観音古墳でもそれと同様の顔料が存在するかどうかは、同古墳を理解する上で根本的な問題となろう。そこで本報告では、こうした視点から日田穴観音古墳で使用されている彩色顔料をもう一度検討してみることにする。

2. 調査方法

穴観音古墳においては、奥壁同心円紋部分において従来から「赤」、そして「緑」または「黒」と指摘されている箇所をそれぞれ調査対象とした。測定は、ファイバー型分光光度計を用いて可視光反射スペクトルを測定し、低レベル放射線源を用いた簡易元素分析装置により成分分析を行うことで、原則としては壁面に触れずに現地を行った。各装置の機種名や測定条件等は柄津の報告を参照されたい。なお、近接するガランドヤ1号墳、2号墳についても、比較のために同様の方法で観察される顔料を調査した。また、同じく日田市の法恩寺3号墳においても、赤の顔料が認められたため、その部分の色を上記分光計により計測した。なお、これらのうち問題となる穴観音古墳の「黒色」（または緑色？）顔料については、日田市教育委員会より極微量試料（径0.1mm未満）の提供を受け、それを実体顕微鏡で観察し、X線分析顕微鏡にて元素分析を行った。

3. 結果

結果は表1に示す。

赤の部分は、穴観音古墳、ガランドヤ1号墳、2号墳、法恩寺3号墳とともに、ベンガラと類似したスペクトルを示し、分析を行わなかった法恩寺3号墳以外ではいずれも成分分析で鉄が顕著に検出された。それ以外の色については、ガランドヤ1号墳、2号墳では緑土に類似したスペクトルを示す部分（図1）が見られ、その部分は成分的にはバックグラウンドの岩石と区別が困難であった。これに対して穴観音古墳で見られた問題の色は、可視域に反射を殆ど示さないスペクトルであり、上記の「緑」のスペクト

ルとは異なった(図1)。この部分からは、現地分析において鉄が検出され、実験室の分析では鉄の他に珪素が検出され、ごく僅かにマンガンが検出された部分も認められた。実体顕微鏡観察では、黒色物質ばかりでなく、石英や長石などの透明鉱物の粒子も認められた。

4. 考 察

今回調査を行った赤色顔料は、いずれも鉄を発色の主要因とするベンガラと考えられる。それ以外の色の顔料としては、ガランドヤ1号墳と2号墳では、緑色顔料としての綠土が用いられていると考えられる。これは、ガランドヤ1号墳については既に江本⁽⁶⁾によって記載されており、朽津・山田⁽⁷⁾によっても確認されていたが、今回の調査によってガランドヤ2号墳にも同様の緑色顔料が用いられている可能性が示されたことになる。(なお、ここで言う「綠土」とは、銅の緑色顔料である「綠青」に対する概念として、鉄を発色の主要因とする緑色顔料の顔料名として用い、その鉱物学的な議論は朽津の報告を参照されたい。)

これに対して穴観音古墳については、少なくともそれと同様の色の顔料は認められず、赤以外のもう一色の顔料は、スペクトルで見る限りでは「黒」と呼ばれる方が妥当と考えられる。従って穴観音古墳は、山崎が指摘していたとおり「赤と黒の二色が用いられている」古墳と記載されるべきであり、この点で近接する「赤と緑の二色が用いられている」ガランドヤ1号墳、2号墳とは区別されるべきであろう。その黒色顔料は、僅かとは言えマンガンを含んだ部分も認められたことから、山崎⁽²⁾の指摘するマンガン土と類似した物質である可能性もあるが、極微量の提供試料で調べる限りでは、マンガンをそれ程多く含んでいるとは考えにくい。こうした特徴は、例えば王塚古墳など、これまで装飾古墳で確認されている黒色顔料としての「マンガン土」とは異なるため、それらとは区別して記載される必要があるかも知れない。石英や長石などの透明鉱物を含有する特徴は、「黒色顔料」の分析結果では他に飯塚市の川島古墳での例が知られており、可能性としては川島古墳で報告されているような「黒色顔料」と何らかの類似性が想定される。つまり、王塚古墳で見られるような「マンガン土」とは一応区別して記載され、しかし竹原古墳で見られる木炭⁽¹²⁾のような黒色顔料とも異なる、装飾古墳に用いられている新たな鉱物質の黒色顔料を考える必要が生じるであろう。これは、マンガンをそれ程大量に含むわけではなく、珪素や鉄などを主成分とし、石英などの造岩鉱物を含んだ、岩石や土壤の様な何らかの鉱物質の物質と思われる。そうした成分的特徴で言えば、これはむしろ從来は「青」と呼ばれていた「灰色顔料」の分析結果の方に類似した特徴が見出される。実際、川島古墳の報告書によれば、当該顔料の色は「黒色～帶青黒色」と表現されており、穴観音古墳でもこの色は過去に「黒」ではなく「緑」と報告されてきた場合が多かったのは、恐らくこれらの顔料には透明鉱物も含まれているため、マンガン土や木炭に比べて黒さが淡く感じられることによるのではないかと推定される。その意味では、成分的に恐らくは連続的と思われる鉱物質の各顔料について、それを「黒色顔料」とか「灰色顔料」などと厳密に区別して呼び分けるのは困難な場合があるかも知れない。しかしながら少なくとも今回の試料のスペクトルは、珍敷塚古墳などで指摘されている「灰色顔料」のものとは明らかに異なり、可視域に殆ど特徴的な反射を示さないことから、ここでは「黒色顔料」と呼んで区別し、それが從来から報告されているマンガン土や木炭とも異なる、新たに記載されるべき黒色顔料である可能性を指摘することとする。

今後はこうした観点から、それぞれの古墳に関する議論が深まることが期待される。

謝辞 現地調査にご協力いただいた、日田市教育委員会の土居和幸氏と大分県立歴史博物館の山田拓伸氏に感謝します。

引用文献

- 賀川光夫 (1951) 大分県日田市附近に於ける装飾古墳。考古学雑誌, 37, 170-177
- 山崎一雄 (1951) 装飾古墳の顔料の化学的研究。古文化財之科学, 2, 8-14
- 斎藤忠 (1952) 装飾古墳の研究。吉川弘文館
- 大分県教育委員会 (1995) 大分の装飾古墳
- 朽津信明 (2002) 古墳などに使われた彩色顔料。保存科学研究集会2002「古代の色」, 28-39. 奈良文化財研究所
- 日田市教育委員会 (1986) ガランドヤ古墳群
- 朽津信明 (2000) 大分県下の石仮の彩色について。保存科学, 39, 33-42
- 朽津信明 (2003) 日杵磨崖仏で観察される彩色表現について(2) -屋外彩色文化財の現地分析法の展開-。保存科学, 41, 19-27
- 朽津信明 (1997) X線分析顕微鏡による文化財試料の分析。保存科学, 36, 91-94
- 朽津信明・川野邊満 (2000) 九州装飾古墳の緑と「青」について。保存科学, 39, 24-32
- 飯塚市教育委員会 (1991) 川島古墳。飯塚市文化財調査報告書第14集
- 朽津信明 (2002) 装飾古墳の顔料について特に緑と「青」の問題を中心として-。第51回埋蔵文化財研修集会要旨集。155-174

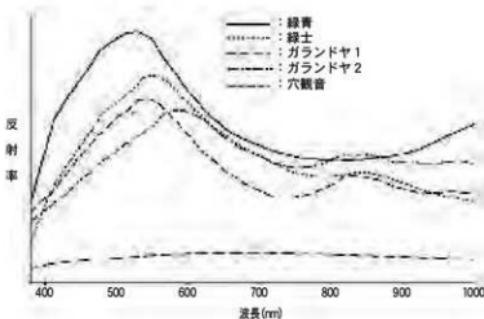


図1 各試料の可視光反射スペクトルの比較

穴觀音古墳のものは、ガランドヤ1号墳、2号墳の緑色顔料とは異なり、可視域に殆ど特徴的な反射を示さない。

表1 分析結果一覧

古 墳	色	主 要 元 素	スペクトル	解 析
穴 観 音	赤	Fe	ベンガラ	ベンガラ
	黒	Si, Fe, (Mn)*	黒	鉱物質の黒色顔料
ガラン ドヤ 1号	赤	Fe	ベンガラ	ベンガラ
	緑	Fe	緑土	緑土
ガラン ドヤ 2号	赤	Fe	ベンガラ	ベンガラ
	緑	Fe	緑土	緑土
法 恩 寺 山 3号	赤	-	ベンガラ	ベンガラ

*: 実験室におけるX線分析顕微鏡による元素分析結果 -: 未分析



穴観音古墳全景（北より）

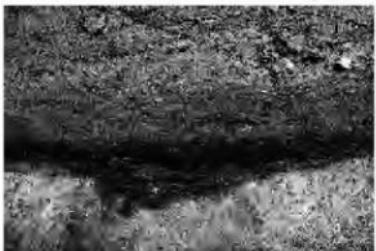


穴観音古墳全景（真上より）

図版2



① 1 トレンチ完掘状況（東より）



② 1 トレンチ周溝



③ 1 トレンチ墳丘版築



④ 2 トレンチ完掘状況（東より）



⑤ 2 トレンチ周溝



⑥ 2 トレンチ東側土層



① 3 トレンチ完掘状況（南東より）



② 3 トレンチ周溝



③ 3 トレンチ東側土層



④ 4 トレンチ南側完掘状況（南より）



⑤ 4 トレンチ周溝



⑥ 4 トレンチ溝

図版4



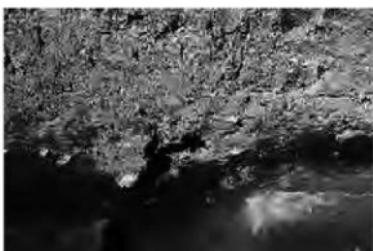
① 5 トレンチ完掘状況（東より）



② 5 トレンチ土層



③ 6 トレンチ周溝（南より）



④ 6 トレンチ土層



⑤ 7 トレンチ完掘状況（東より）



⑥ 7 トレンチ土層

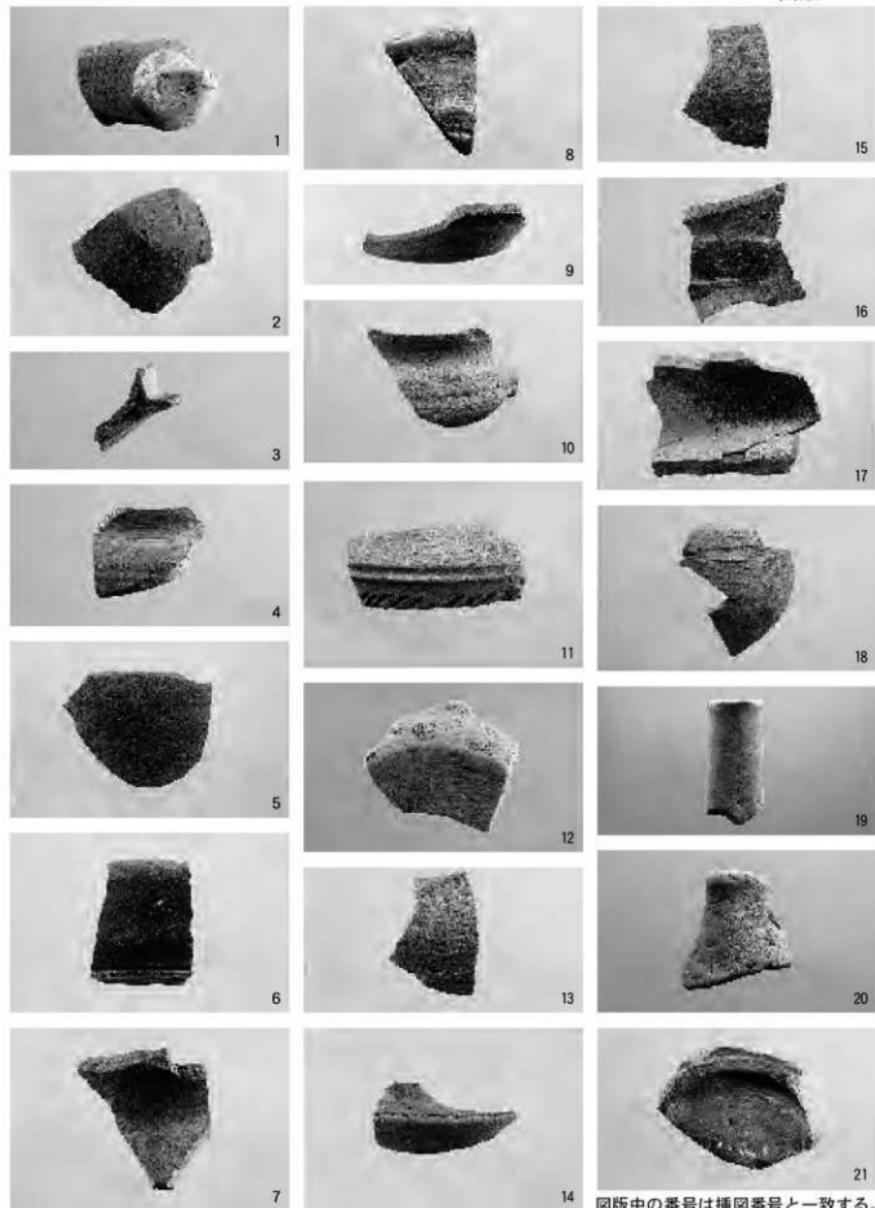


⑦ 8 トレンチ完掘状況（北より）



⑧ 8 トレンチ土層

図版5



図版中の番号は挿図番号と一致する。

報告書抄録

ふりがな	あなかんのんこふん
書名	穴觀音古墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田地区遺跡群発掘調査報告／日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	2/41
編著者名	若杉竜太
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2003年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あな かん のん こ ふん 穴 観 音 古 墳	おおいたけんひ た し 大分県日田市 おおあざうち が に あざくらそむ 大字内河野字倉園 5番地ほか	44204-6		33°18'28"	130°54'21"	20020212 ～20020327	62m ²	範囲内容 確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
あな かん のん こ ふん 穴 観 音 古 墳	墳墓	古墳時代	周溝・溝	須恵器・土師器	周溝の確認

